

# 現代モンゴルの住生活と生活財：

## その考現学的調査

面矢慎介

### 1 はじめに

ゲルの土間にしゃがんで、ゲルの中にあるさまざまな物（生活財）をひとつひとつ図面に書き込んでみると、まず決まって子供たちが覗き込みに来て、にやにや笑っていく。言葉は通じなくとも何を描いているかは子供にもすぐわかる。ゲルの中の物の配置の仕方など、彼らにとってはあたりまえのこと。こんな当たり前のことをわざわざ遠い外国から来た大人が一生懸命に図にしている。それが滑稽に思えるらしい。

我々のおこなった生活財（註1）の調査は、現地の人からみても「大の大人がやるべきこと」ではないのかもしれない。しかし、円形のゲルの中の独特の空間に置かれているさまざまな物（生活財）の集まりは、現代のモンゴルの日常の暮らしぶりを最も直接的に目に見えるかたちで我々に伝えてくれる、との直感があった。

物の持ち方・置き方の家ごとの差異はどこからくるのか。遊牧生活と都市生活のちがいが物の持ち方・置き方にどのように現れるだろうか。そして市場経済の導入による物の生産や流通の変化が、各家庭の生活様式に今後どのような影響を与えていくのか。そして遊牧生活とまったく異なる生活原理で暮らす日本家庭における物の集まりと比較したならどのような違いが見つかるだろうか。今後これらのことを考えていくためには、単なる写真記録ばかりでなく、ゲルの空間とその物たちの全体を一覧できる記録に留めておきたい。そのためには、どんなに稚拙な行為であるとしても、置かれている生活財を、時間の許す限り細部まで図に描き込んでいくしかない。

このようなことを考えつつおこなった調査の一端を、以下に報告する。

### 2 生活財の考現学的調査について

今回の調査の目的は、現代モンゴルの住生活の実態をできる限り具体的に観察・記録することであった。そのために、典型とおもわれるいくつかの住居タイプを設定し、それぞれの事例となる家庭を選び・訪問して、住居と住居の中の生活財を観察・記録するとともに、各家庭の居住歴、生業、家族構成、日常の生活時間・生活空間等についての聞き取りをおこなった。

生活財の記録という調査手法は、今和次郎らの考現学を継承しようとの意図にもとづいている。今自身は、この手法を「持ち物調査」と呼んだ。一人の人、一軒の家が所有するすべての品物を悉皆調査することによって、その人、その家の生活像を浮かび上がらせようとする試みであった

(註2)。

住居の中に置かれているそれぞれの物は、なんらかのかたちで居住者の生活行為と対応しているばかりでなく、それらの物の集まり方は居住者の生活意識を反映しているはずである。私たちの持ち物調査は、激しく移りゆく1920年代の日本の風俗をとらえようとした手法であったが、ここではそれを現代モンゴルの住生活の実態をリアルに把握するために用いてみた(註3)。

今回の調査(1996年7月～8月)は、定住生活と遊牧生活の比較のための事例を採集することを意図して、主にモンゴル中部のウランバートル市内と北部のフブスグル県の2地域でおこなったが、セレンゲ県、ウブルハンガイ県の遊牧地域でもそれぞれ若干の事例を得た。

### 3 現代モンゴルの住居タイプ

いうまでもなくゲルは、家畜を伴って季節ごとに移動する遊牧生活に最も適したかたちに発達した住居形態である。しかし現代モンゴルの都市部では、このゲルで定住している例も多く見られる。首都ウランバートルでは、遊牧地域から移り住みゲルで定住する人口が特に1970年代から増加したという。草原でのゲルと対照的に、都市に定住したゲルは、板塀で囲った敷地のなかに建てられている。遊牧ゲルと定住ゲル、それぞれでの日常生活の実態の違いを観察・比較することが、今回の調査の主要な関心だった。

都市に定住したゲルのなかには、同じ敷地内に建てられた木造住宅と併用されているものがある。夏は風通しのよい木造に住み、冬は暖かいゲルに住むという住まい方が一般的である。また近年はゲルから木造へ完全に移り住んでしまうことも増えている。ゲルでの定住は、生活用水や下水の問題など、現代都市のインフラストラクチャーとの齟齬を引き起こしている。都市におけるゲル定住は、過渡的な現象なのか否か、その今後の動向を見据えることにも関心があった。

一方、ウランバートル中心部には近代的なコンクリート造の中層アパート地区がある。これらアパート群は、1940年代以降、旧ソ連・東欧・中国の援助を受けて建設され、現在も増加している。アパートでの住生活は、ゲルでのそれと大きく異なり、まったく純西洋風である。その多くがゲルでの生活体験がある都市生活者の中には、夏の間だけ、郊外の別荘(遊牧生活での夏営地と同じく「ゾスラン」と呼ぶ)から都心に通勤する人々がいる。都市に出て定年まで働き、年金生活に入ると故郷の遊牧地域に帰ってゲルで暮らす人もいる。これら都市のアパート居住者たちの意識の中には、ゲルでの生活はどのように映っているのだろうか。これも、モンゴルの住居・住生活の今後を考えるために大きな課題である。

今回の調査では、以上の概観にみるように現代モンゴルにおける主要な住居タイプとして、遊牧生活の伝統的住居であるゲル(遊牧ゲル)のほか、都市に定住しているゲル(定住ゲル)、木造住宅、コンクリート造アパートの計4タイプを設定し(註4)、それぞれ調査対象となる家庭を探した。訪問調査する家庭は、ウランバートル市内では現地共同研究者・協力者を介して典型

的と思われる事例を選んだが、その他の地域では旅程の途中で見つけたゲルの中から選び、特に前触れもなく訪問した。生活財配置状況の記録までを許していただいた家庭は、ゲル10例、木造2例、コンクリート造アパート2例の計14例である（註5）。

この限られた事例からモンゴル全体の住生活について正確に論じることはもとよりできないが、各家庭内の生活財の具体的様相をつぶさに観察することによって、まったく異なる生活環境に暮らし、異なる住生活体験を持っている我々でも、彼の地の人々の日常生活のおおよその姿をある程度まで推しはかることができるだろう。

#### 4 ゲルの住まい方：基本的起居様式の概観

個々の調査事例を紹介する前に、ここでモンゴルの伝統住居・ゲルの中での基本的な生活スタイル、中でも特に生活財との関連の深い起居様式（つまりゲル内部での生活動作・姿勢などの身体技法）について概観しておきたい。本稿で注目する生活財とは、結局のところ、以下のようなゲルにおける住まい方・動作の様式（ソフトウェア）をサポートするモノ（ハードウェア）とみることができる。そして、住まい方の起居様式というものは、日本の住居での靴脱ぎ・床座習慣の例でもわかるように、一般にきわめて保守的で変化しにくいと考えられる。モンゴルでは、現在でこそ木造やコンクリート造アパートに住んでいる人でも、圧倒的多数がかつてはゲルに住んでいた体験を持つ。ならば、以下にみるようなゲルでの起居様式は、彼らにとって「身に染まった文化」となって、何らかの形で共有され、伝承されているのではないだろうか。ただし、今回の調査では参与観察などによる住まい方の本格的な観察は行っていない。以下は、あくまで訪問時の短時間の観察、および生活財配置の状況からの推測を含んだ概観モデルである（図1・伝統的ゲル内の主要生活財配置図参照）。

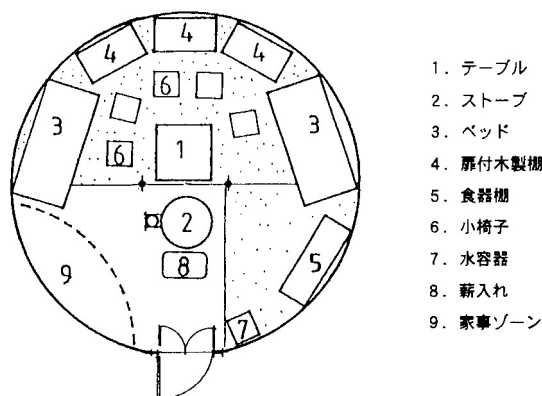


図1 伝統的ゲル内の主要生活財配置  
 (Maidar, D. "Analyse des Wohnungszustandes in der Mongolei vor 1921" による)

( ある遊牧ゲルの夏の一日 ---- 生活財と起居様式の素描 )

夏の朝、一番にベッドから起き出すのは一家の主婦役の女性だろうか。夫は反対側のベッドで寝ており、小さな子供たちはゲル奥側の地面に敷かれたフェルトの上で眠っている。靴を履き(基本的にゲルの中でも靴は履く)、ストーブに燃料(畜糞あるいは薪)をくべ、朝食の乳茶の準備を始める。水は前日に汲んできて置いた容器から使う(食器や食材、調味料は食器棚に置いてある)。調理は立ち姿勢が基本だが、膝を地面についてナイフを使ったり、團茶を突き臼でついたりもする。ストーブにかけた鍋をみる時には小椅子を持ってきて座ることもある。

食事はストーブ奥側の低いテーブルに配膳する。まだ眠っていた家族を起こし、年少の子供たちに着替えをさせる。衣類は奥のチェストに入れてある。起き出してきた家族はそれぞれゲルの外で歯を磨き、小椅子に座ってテーブルを囲む。隣のゲルに住む夫の両親も食べに来る。小椅子に座りきれない者は器を持ってベッドに腰掛ける。食事が済んだ後の食器はゲルの外に盥を持ち出してしゃがんで洗う。

一室住居のゲルに、もちろんトイレはない。家族たちは思い思いにゲルから出て遠くに歩いて行く。「プライバシー」はゲルの外、広大な草原にあるのだ。「大」の方はゲルから数十メートル離れた所に穴を掘っておき、溜まると埋めて新しい穴を掘る。

夫は家畜の放牧に出かける。残った妻は、夫の母とともに乳製品づくり(バター、チーズ、クリーム、ヨーグルトなどの自家生産が夏の間の大きな作業である)を始める。ここでもストーブが活躍する。ストーブの周囲と入り口側の空間が主な作業場所である(乳製品づくりの道具は、入り口に近い壁際に並んでいる)。ひと休みするときはベッドに腰掛ける。年長の子供はゲルの中の掃除(箒で床を掃き清める)を手伝い、水汲み、燃料拾いに出かけたりする。年少の子供たちはゲルの周囲で遊んでいる。

夫の父は、自分たちのゲルに戻り、ゲル奥側の地面に敷いたフェルトに腰を下ろして、ときどき煙管で煙草をすいながら、皮なめしや家畜用の革綱の手入れをする。

夫は放牧地から搾乳する家畜を連れて帰ってくる。妻はゲルの外に出て、夫と二人で一日に何度か搾乳の作業をする。昼食をはさんで乳製品づくりは続く。そのうち、同じ郡内に住む顔見知りの夫婦がふらりとやってくる。客はゲル奥側左の小椅子に腰掛ける(客の数がもっと多いときには西側のベッドに腰掛けてもらうこともある)。さっそくストーブに鍋を架け、乳茶を作って出す。テーブル上に干しチーズを盛った皿を出し、つまんでもらう。彼らは近くを通りかかるといつもこうして、しばらく世話をしている。今日は馬乳酒も出してあげる。女たちはときどき乳製品づくりの手を休めて、立ったまま、あるいは小椅子に座って対応する。

やがて夕刻までには外に出かけていた家族全員が帰ってきて、小椅子やベッドに腰掛けて休む。夕食づくりは夫の母も手伝ってくれる。夕食とその後かたづけが済んでしばらくすると、両親は隣のゲルにもどる。夫婦と子供たちは、テーブルに置いた蠟燭の明かりを囲んで話をしたり、ラジオを聞いたりしながら、思い思いの姿勢で(小椅子、ベッド、床のフェルト上に座って)時間

を過ごす。今日は暑い一日だった。濡らした布で体を拭いた後、やがて全員が就寝する。

以上の素描にみるように、ゲルでの基本的な起居様式は、地面あるいはフェルト面上の床座(腰を床面につける、膝を床面につける)、椅子座(小椅子あるいはベッドを使う)、立ち姿勢が混在している。図1のような主要生活財の配置がそれらに対応している様子がある程度はイメージしてもらえたであろう。

次に、今回の調査事例のなかから、前述した住居タイプ別に最も典型的と思われた事例を紹介しつつ、各々の生活財の様相から読みとれる住生活スタイルについてさらに述べてみたい。

## 5 住居と生活財の考現学的記録

### (1) 遊牧のゲル

草原の遊牧民は春夏秋冬の季節ごとにゲル設営地を移動する。今回の調査で実見することのできた以下の事例は、すべて夏営地の状況である。

#### 事例1・ロブサーダエ家(遊牧ゲル)

我々が最初に出会ったフプスグル湖畔のロブサーダエ家のゲル(図2)は、今回調査した中でも伝統的遊牧生活の様式をよく残しているゲルだった。

このゲルを含むゲル集団は3戸。数百m離れた所にさらに2戸の親戚のゲルがある(註6)。このゲルには、ロブサーダエ(76歳)と妻(73歳)、養女とその娘、隣のゲルに住む長男の娘の計5人が住んでいる。

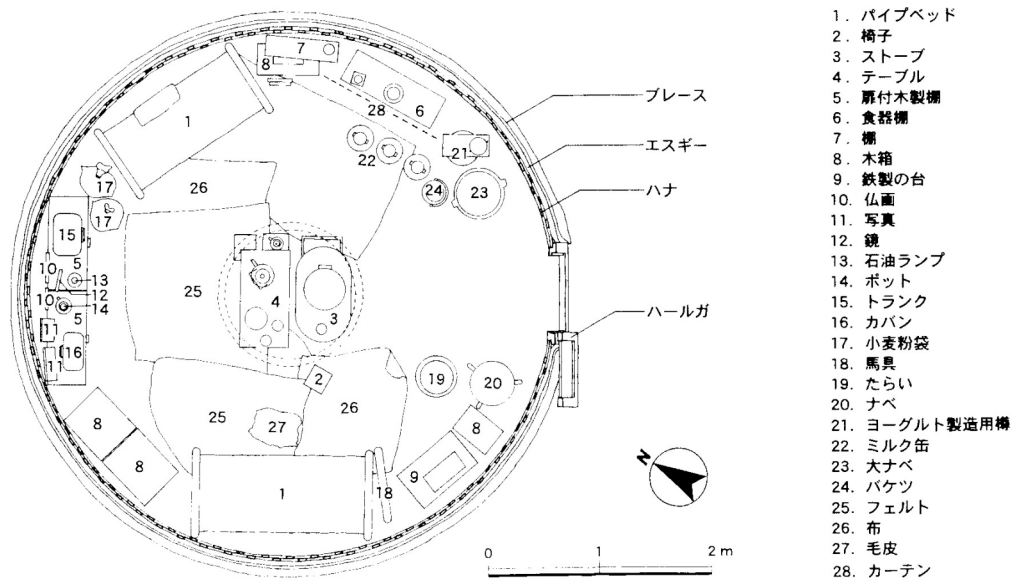


図2 ロブサーダエ家

ロブサーダエ氏は県内のリンチンルンベ郡出身のダルハト族（註7）。ここハトガル郡には1980年に越してきた。91年の民営化まではネグデル（社会主義の農牧業協同組合）の牛を飼っていたが、現在はヤク20頭、牛9頭（うちヤク牛4頭）、羊20頭、馬8頭を飼う。放牧は若い者たちにまかせているのか、現在の彼の主な仕事は、革紐をなめして編んだチュドル（馬の足を留める綱）づくりだという。

このゲルは4年前に長男が自作したもの。4枚ハナ（伸縮格子の側壁。通常4〜6枚を円く連ねて側壁とする）の小さめのゲルである。生活財の配置を見ると（図2）、家具はやや少なめである。ここから約10km離れた冬営地には木造の物置があり、家具類を少し置いてきている。

ゲル奥正面の2つのチェスト（註8）は祖父の代から持っているもので1940年ころの購入。その上には家族の写真や仏画などが飾られている。2台のベッドはスチールパイプ製で比較的新しそうだ。一台はやや変則的に中央横よりも奥に置かれ、その分、いわゆる「女の領分」、つまり食器棚やヨーグルトの入った大鍋、各種の乳缶などを置く台所的な空間が広くとられている。細かく見ると、ここには、團茶を砕く突き臼、刃の短い包丁、乳製品づくりの攪拌桶など、伝統的な形の生活財（註9）も散見される。ここで働くのは、妻と養女の二人である。我々が訪問している間にも、さまざまな乳製品づくりがおこなわれ、ゲルの屋上（東側）には板に載せたチーズ類が干されていた。この夏営地は森林に近く、ストーブの燃料は糞よりも木切れが中心のようだった。（今回の調査地はモンゴル全体から見れば森林の多い北部・中部であったため、獣糞を燃料にしている事例は少なかった。）水は湖から採り、乳缶に入れて運んできている。ストーブ奥側の小卓（図では我々にふるまってくれた乳茶やチーズ類が載っている）の配置は、今回見た

他のゲルでもほぼ定式化していた。

以上、このゲルは湖と森林に近いというやや特異な立地であるものの、遊牧生活の伝統的な暮らし方をよく示す事例であった。

#### 事例2・ムンフバット家（遊牧ゲル）（註10）

遊牧地のゲルをもう一例みておこう。図3のムンフバット家は、北部フスグル県ウルント川畔の草原に設営されていた4戸からなるゲル集団の一戸。この4軒は互いに親戚同士（最近寡夫となった父、長男夫婦、次男夫婦、次男の嫁の両親）のゲル集団であった。ムンフバット（27歳）はこの家族の長男である。妻（26歳）と男の子（0歳）とともに、夏の間はここで暮らす。普段はハトガル（数十キロ離れた町）で大工などを行っている。所有する家畜は、雌馬2頭、牛（ヤク舎）4頭、羊・山羊10頭と少ない。この夏は、ここで父のログハウスを建てている。

弟（25歳）の夫婦はここで父とともに遊牧民をしているが、妹（22歳・既婚）は大学生で普段はウランバートルの学生寮に住む。その夫はゴビアルタイ県の商社勤め。私たちが訪れたのは、ひと夏の間、普段は離れて暮らすこの家族が集っているゲル集団であった。定住化がすすめられている現在のモンゴルでは、遊牧地域で見られるゲルの中にも、この事例のような期間を限ったゲル住まいが多数含まれていると思われる。特に夏営地では、休暇を利用して故郷の遊牧地に帰り、ひと夏を家族と過ごす都市生活者がいる。

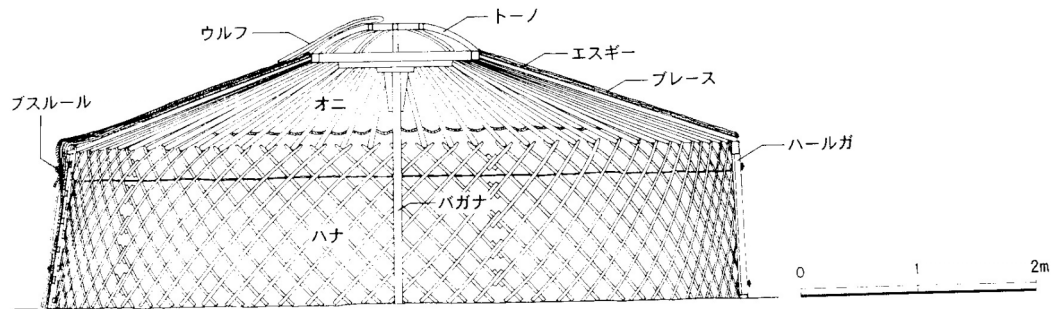
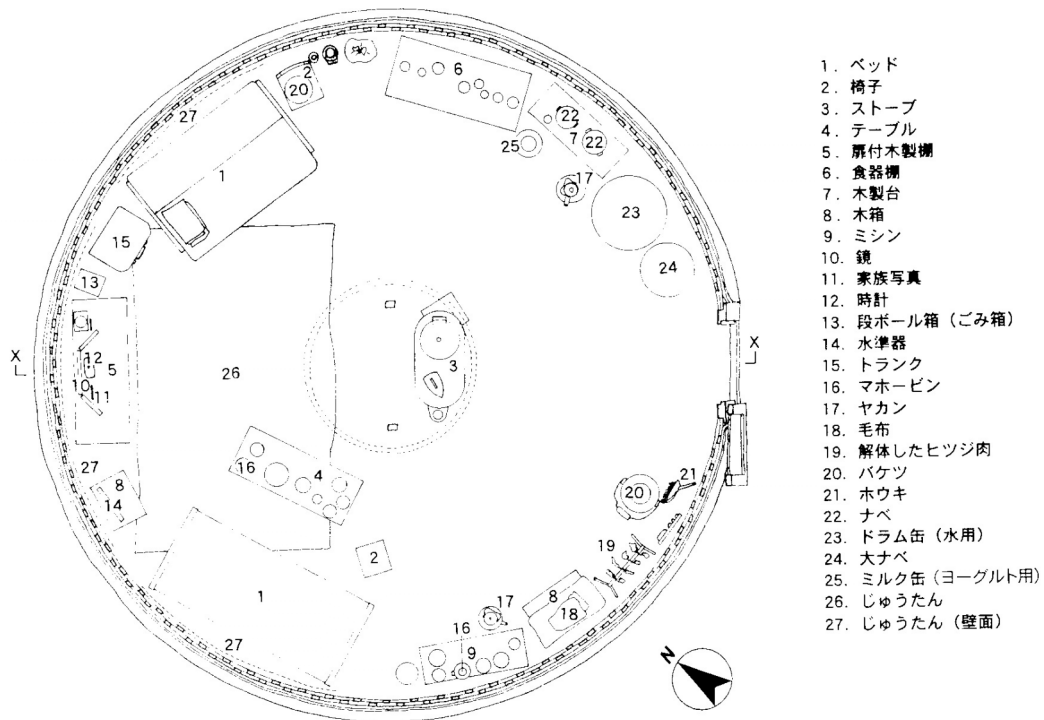


図3 ムンフバット家

図3のゲルは夏の間（7月から9月の約3カ月）だけここに設営される。ここにある家具の一部は、夏が終わればハトガルにある木造の家を持ち帰るといふ。夏の間だけのゲル暮らしであるためか、全体的に家具は少なめである。

それでも、伝統的な区分にならって、入口に入って右側には食器棚、水のドラム缶、ヨーグルトなどが入った乳缶、鍋類などが集められている。ここに中央のストーブを含めた、台所にあたる空間ができていふ。配膳のスペースがないためか、入って左側のミシン台の上に魔法瓶や小鍋などを置いている。これはやや変則的配置である。

ちょうど我々の訪れた日、ムンフバットは外で羊を一頭解体してみせてくれたが、解体した羊の肉はゲルに入って左側のハナ（側壁）に架け、頭・皮・足先はその下に飾った。（多分、賭殺儀礼であろう。内臓は女たちが鍋に入れてどこかへ持ち去ってしまった。）この位置が伝統的定



式によるものかどうかかわからないが、ゲルの中心線から右（東）側が女の空間、左（西）側が男の空間、というゲルの伝統的空間区分（註11）を守っている、とも受け取れる。（家畜の解体は男の仕事なので、その結果としての肉や頭などは左（西）側に置かれると解釈できる。）

奥正面のチェスト（アブダル）は一個だけ（普通は二個以上を並べることが多い）だが、上面には鏡、置物、時計とともに家族写真を飾って、人の視線を集める室内景観上のポイントになっている。ベッド2台（うち一台はソファベッド）は、奥に寄ったやや変則的な置き方。夫婦と赤ん坊ならこの2台で寝られるが、奥側に敷かれた布絨毯の上で並んで寝てしまうのかもしれない。絨毯の上などには、這いはじめた子供のための玩具（プラスチック製である）が散らばっている。図中、左側ベッドの前に食べ物を載せたテーブルを寄せているのは、ベッドに腰掛けた来客、つまりこの日訪れた我々を乳茶とチーズでもてなすための置き方なのか、普段もここでこうして食べているのかは不明だった。

この図のムンフバットのゲルの中には、チェスト（アブダル）や火ばさみ（ハイチ）などを例外として、近代化以前の伝統的な形や素材そのままの生活財はほとんど見られない。しかし、ひとつひとつは現代の製品に置き換わっていても、その配置は伝統様式を踏襲しており、これらの生活財を使って営まれるゲルの住生活は、昔ながらの遊牧生活とほとんど大差ないように思われる。

## （2）定住のゲル

次に、遊牧生活とは対照的な、都市に定住しているゲルの生活を見ておこう。コンクリート造のアパートが林立する都市に、草原で見ると同じゲルが併存する特異な状況こそ、今回の調査で最も探ってみたい現象のひとつだった。首都ウランバートル市には、現在18箇所のゲル集中地区がある。これらの地区の中には木造住宅もあり、すべてがゲル居住というわけではない。コンクリート造アパートを建設して、ゲルからの住み替えをすすめていくのが、現在の市の基本政策である（註12）。

### 事例3・ツェレンダワ家（定住ゲル）（註13）

ツェレンダワ家（図4）は、市北部のチンゲルティ区のゲル地区の中にある。（同区は、1万7千世帯のうち、66パーセントがゲル居住。）市の北側のチンゲルティ山に続く丘陵地帯にあり、各戸ごとの板囲いの中にゲルと木造とが混在するゲル地区の一戸。この辺りにゲルで住み着く家が増えてきたのは1984年ころからだといいい、比較的新しいゲル地区である。

ここに住むのは、主人のツェレンダワ（76歳）と妻（70歳）の年金生活の老夫婦。二人とも西部のザブハン県出身である。氏はもともと遊牧民で、後に獣医をしたが、1976年、進学する息子とともにウランバートルに出てきた。今の場所に移ってきたのは1983年という。

この辺りは牧地のある丘陵に近く、ツェレンダワ家でも牛4頭（うち乳牛3頭）、子牛3頭を飼っている。朝、乳を搾って牧地に出し、夕方戻ってきたときにまた搾る。3頭で一日14リットルの乳になるという。この家のように、都市郊外のゲル居住者の場合、家畜を飼うことがよくある。この家では野菜畑でジャガイモなどもつくっている。

このブロックのすぐ近くに給水所があり、飲料水はそこから汲んでくる（クーポン券との交換方式）。洗濯は家でするが、入浴は地区内の公衆浴場（詳細不明だが、男女別の個室式シャワーらしい。今は壊れているので、週一回、親戚の所にシャワーを浴びている）に行く。便所（汲み取り式か）は敷地内に小屋を設けてある。食料品は、この近くの店で買っている。

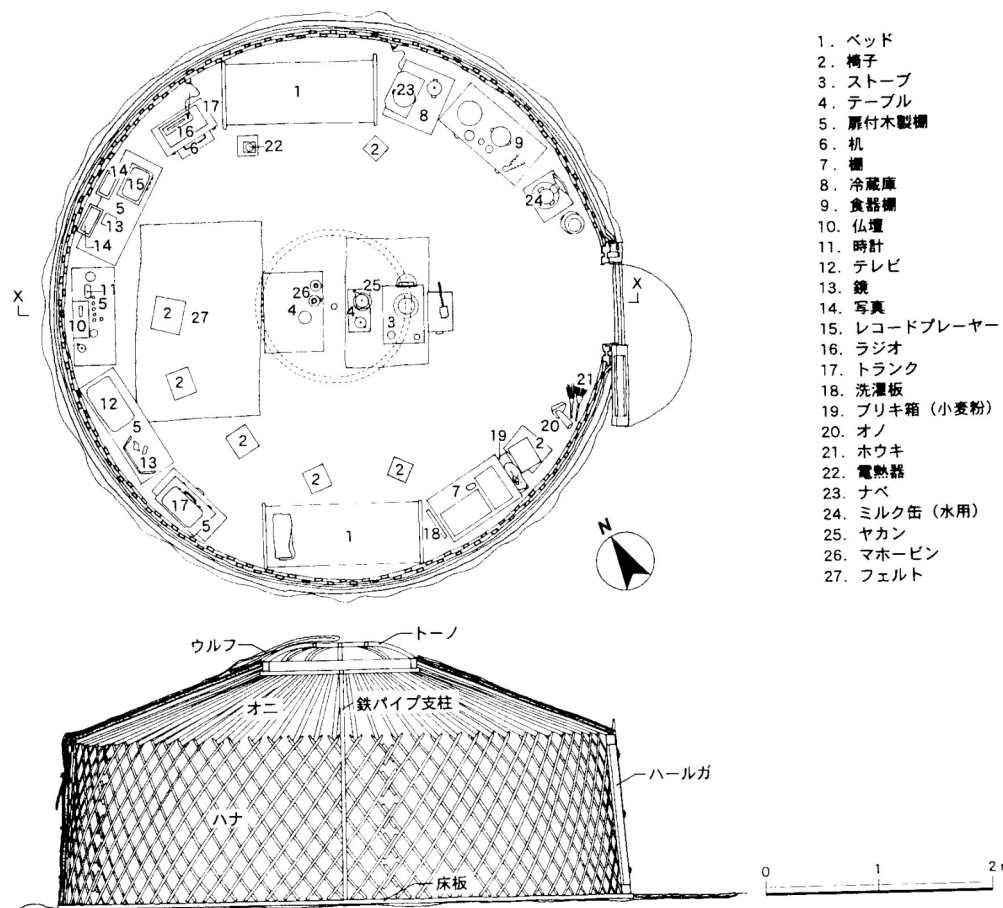


図4 ツェレンダワ家

ゲルの中の生活財配置（図4）を見ると、基本的な配置の原理は遊牧地のゲルと大差ないが、都市に定住するゲル生活の特徴がいくつか見て取れる。まず、遊牧生活では移動の際に重い荷物になる板床はほとんど見られないのに対して、定住のゲルでは、湿気対策のためか、ほとんど板床を敷いている。電気がひかれ、電気製品を使っているのも定住ゲルの特徴だろう。このゲルに

は、二つのコンセントがあり、天窓下の電灯（裸電球）のほか、台所部分には冷蔵庫が置かれ、ほかにテレビ（カバーが掛けてある）、ラジオ、レコードプレーヤー、電熱器を使っている（註14）。奥のチェストは4個が並び、夫婦二人には所有している物の多さがうかがえる。正面のチェスト上は、仏画、バターの灯明、ミニ車などを置いた仏壇になっている。今回調査で訪問した家のなかでは、これが最も本格的な仏壇のしつらえであった（仏壇については後述する）。

中央のストーブの燃料は、薪のほか、外の牛小屋の屋根と壁に貼って乾燥させた牛糞、外の石炭小屋に置いてある石炭を併用しているようだ。牛乳を搾っているため、量は少なくとも乳製品を自作している。しかし、食料品が近くの店で買えること、そして電気冷蔵庫の存在は、この家の食生活のあり方に大きく影響していることだろう（註15）。

以上のように、この定住ゲルの暮らし方は、草原での遊牧生活とはまるで違う生業・生活様式でありながら、その生活財と起居様式において、遊牧ゲルとの共通性もかなり認められる。遊牧ゲルの中での暮らし方をできる限りそのまま都市に持って来ようとして、不便な点はそのつど臨機応変に解決してきた。その結果が、このような生活財配置に現れているのではないか。

### （3）木造住宅とコンクリート造アパート

周囲を一戸ずつ板塀で囲ったいわゆるゲル地区の中には、ゲルでなく木造住宅に住む人もいる。ゲル住まいとの比較のために、前述の定住ゲルと同じウランバートル市チンゲルテイ区の木造に住む一家の場合を見てみる。

#### 事例4・バトゲレル家（木造）（註16）

この木造（図5）には、バドゲレル（44歳）、妻（43歳）、4人の子供（14歳、13歳、12歳、6歳）が住む。主人のバドゲレルは北部のボルガン県出身。昨年除隊したもと軍人で、モスクワの陸軍学校卒業後、東部スフバートル県で国境警備に従事していた。今は庭での野菜づくりのほか、商人である弟の仕事を手伝ったりしている。

この家は除隊して年金生活に入ってから、野菜が作れる家を探して購入した。我々が訪問したとき、バドゲレル以外の家族たちは郊外のゾスラン（夏別荘）に出かけて留守だった。家具が少ないのは、ゾスランに持っていっているからだという。

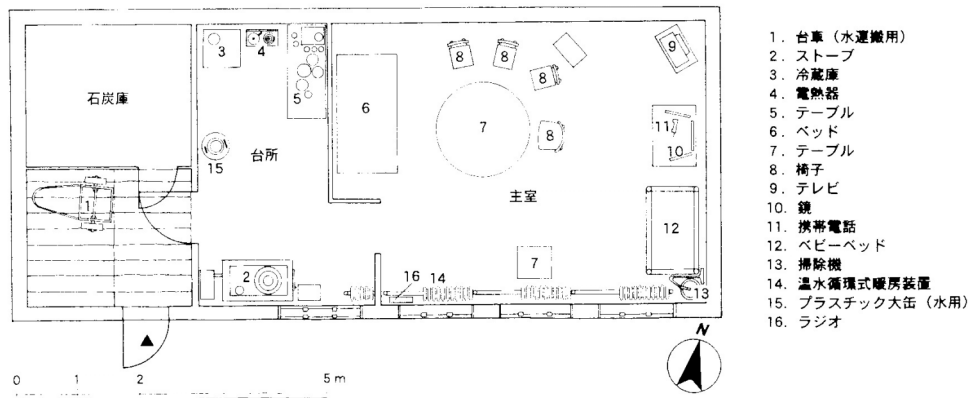


図5 バドゲレル家

図5でみるように、入り口に入ってすぐの前室と物置をのぞけば、主室と台所との2室居住である。ゲルでの「女の空間」にあたるものが、ここでは台所として別室になっている点がゲルとの最大の違いである。ストーブを調理・暖房兼用の熱源にするのはゲルと共通だが、主室には熱湯を循環させて放熱器で暖房している。冷蔵庫を持ち、少量の調理には（あるいは夏の間は）電気コンロを補助的に使っているようだ。飲料水は地区の給水所で大型のプラスチック容器に汲み、前室に置いてある台車で台所まで運んできている。ストーブの燃料は薪と石炭。便所は庭に小屋を設けている。

普段の主室には、おそらくもう1台か2台のベッドが入っているだろう。衣類収納用の家具（チェストあるいは洋服だんす）の置かれている位置が床の痕跡からわかる。裸電球の電灯、テレビ、ラジオ、掃除機などの電気製品のほか、弟の会社の物だという携帯電話も使っている。丸テーブルを囲んでいる椅子はゲルでよく見られる小椅子（スツール）ではなく、背付きの椅子（チェア）である。テーブルをベッドに寄せて置き、ベッドをソファ代わりに（腰掛けに）する使い方は、ゲルでも普通にみられる。丸テーブルを中心にしたこの座具配置は、円形のゲルの中での家族の「集い方」を無意識のうちに再現しているのではないか。

以上を全体的にみると、この木造での暮らしはゲルでの居住習慣そのままを踏襲してはいないものの、ゲルでの暮らしとの連続性もある程度認められる。これは、給水、下水（の欠如）、公衆浴場、燃料供給、送電など、定住ゲルと同じ都市インフラ・施設に支えられている当然の帰結でもある。

#### 事例5・ユンデンバト家（コンクリート造アパート）（註17）

なかば自然発生的に成立してきたゲル地区と対照的に、ウランバートル市内のコンクリート造アパート団地は、市当局によって計画的に建設されてきた居住区である。

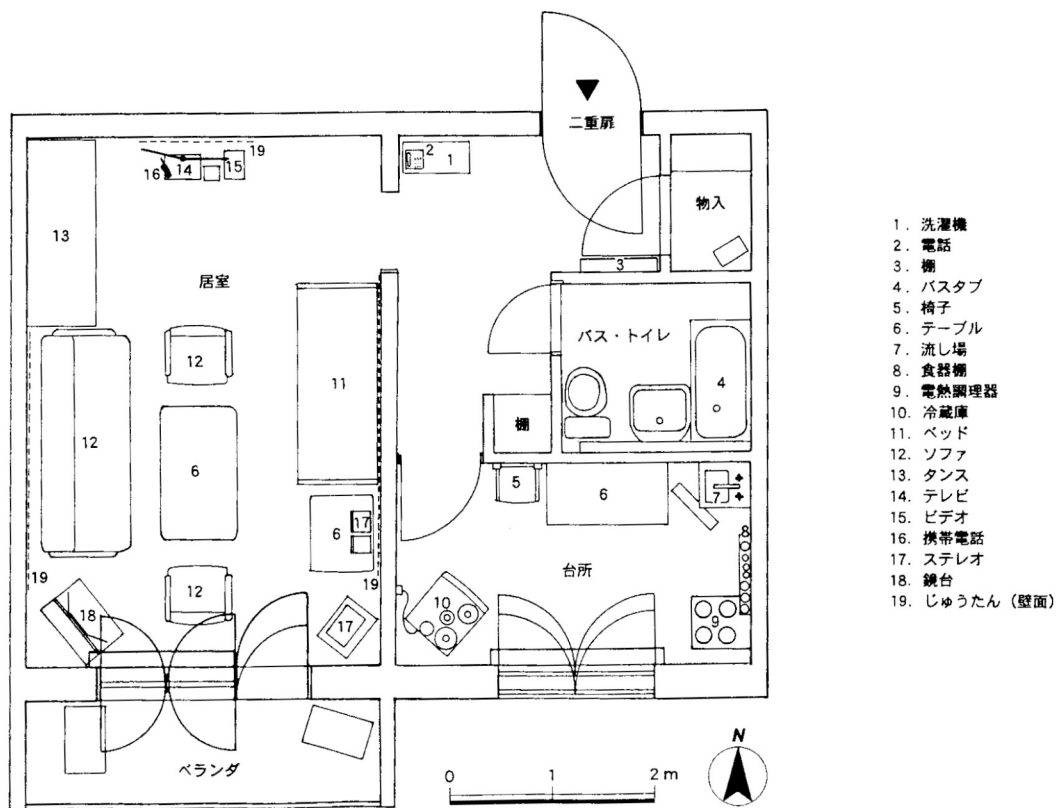


図6 ユンデンバト家

図6のユンデンバト家は、1979年築の9階建てアパート8階の1DK。若い夫婦と3歳の娘が住んでいる。

夫のユンデンバト（25歳）も、同じ年の妻も、ゲルで暮らしていたことがある。主人はウランバートル生まれだが、ここに入る前までゲル暮らし。妻は北部のセレンゲ県生まれだが、小さいときにウランバートルに来てゲルで暮らしている。夫は建築会社の工場勤めの後、1992年から友人とテレビ修理の仕事をはじめた。妻は鉄道局でコンピューターのオペレータをしている。娘はすぐ近くの幼稚園に通う。近くに食料品市場や食品店があり、日常の買い物はそこで済ませている。

このアパートは79年の新築時に入居。ユンデンバトの母親が国から入居権を得た。ここを息子夫婦に住ませ、母親はこの近くの木造に住んでいる。市の住宅管理局に払う家賃は、熱湯式暖房の費用を含む冬の方が高い。

生活財の配置（図6）からは、おそらくどこの国の団地アパート暮らしとも大きな違いは感じられないだろう。台所には電気冷蔵庫とオープンつき電気レンジ（註18）。温水も出る。そしてWC、洗面台付きのバスルーム。ほとんど「西洋式」である。入り口ドア脇の洗濯機は旧ソ連製か。

今は使っていないようで、上に電話機（他に携帯電話も2台持っている）が載っている。

居間には、日本で言う応接セットのソファとテーブル。ベッドの側にも腰掛ければテーブルを完全に囲むこともできる。テレビ修理業という商売柄からか、テレビ、ビデオデッキ、ステレオ（2台）などが置かれている。電灯も裸電球ではなく、モダンなシャンデリア風のもの。ゲルの伝統を思わせる数少ないものに、居間の壁3面にカーペットを掛けている点がある。ゲルでは、ベッドの横やチェストの後方のハナ（壁）に、装飾的な色柄の布やカーペットをタペストリーのように掛けている例があった。これはその伝統をアパートにもちこんだものだろう（註19）。三面鏡の上に置物を飾って装飾的なポイントにしているのも、ゲル奥正面のチェスト上のしつらえ方に通じるものがある。

注目したいのはこの三面鏡の位置である。前の事例4でも、この事例でも、三面鏡の置かれるのは、主室の入り口から最も奥まった場所であり、ここに家族や客の視線を集めるかのような配置を選んでいる。これは、たとえ無意識にせよ、ゲル内の伝統的配置（仏壇あるいは家族写真を奥正面に飾る）のあり方が、彼らの「身に染まった文化」として継承されているためではないか。

ともにゲル居住を経験しているこの夫婦にゲルについて聞くと、夫は「アパートも良いが、小さいときから住み慣れているゲルにまた住みたい」という。「空気の循環もゲルの方が良いし」と。一方、妻は「アパートの方が断然良い」という。「火を起こす必要もなく、薪を割ることもないし、蛇口をひねれば湯も出てくるから」と。おそらく、このあたりがゲル住まいに対する都市住民の一般的な感情だろう。

## 6 まとめ：生活財調査からの考察

生活財に着目しつつ、現代モンゴルの代表的住まい方の事例をみてきた。ここで、これらの事例を通して読みとれることを考えてみたい。

### （1）遊牧ゲルと定住ゲルの生活財

遊牧・定住を問わず、今回調査したゲルの中の生活財をみると、その地域内の材料を使って在来の技術でつくられた「民具」的なものは、意外に少なかった。つまり大半の生活財がどこか別の場所で、手工芸的あるいは工業製品として作られ、何らかの流通経路を経て持ち込まれたものだった。現代のゲルの中の生活財の集まりは、都市から遠く離れた遊牧地域にあっても、この国全体の工業や流通の現状を色濃く反映している。

その意味では、遊牧ゲルと都市定住ゲルの生活財に決定的な違いはない。もちろん、遊牧のゲルには当然ながら馬具や、遊牧生活の重要な構成要素である乳製品づくりの用具が多く、定住ゲルでは多くの場合それらが欠けている。そして遊牧ゲルには、自作した物（あるいは地域の中の

誰かに作ってもらった物)の割合が、定住ゲルよりは多いようである。しかし、これはあくまで程度の問題である。

ゲルの中にある生活財の点数については、季節ごとの移動を強いられ不要不急のものを持ってない遊牧ゲルよりも、その必要がなく物の溜まりやすい定住ゲルの方が多いだろうとの予想が成り立つ。点数まで数えられなかった今回の調査では結論できないが、配置図でみる限り、チェスト(アブダル)や戸棚などの収納家具は、定住ゲルの方がやや多い。その中の物までを含めるなら、馬具や本格的な乳製品づくりの用具の欠如を補っても、定住ゲル住まいの方が物持ち、といっただろう(註20)。ベッド、戸棚、テーブルなどの大型生活財の数については、ゲルの大きさ(特殊なものを除けば4枚ハナ〜6枚ハナの範囲)ともある程度の相関があった。

事例3でみたように、冷蔵庫、電気コンロ、テレビなどの機械製品、いわゆる耐久消費財は、やはり定住ゲルの方に多く入っている。しかし、遊牧ゲルでも、ラジオやラジカセ、ミシン、テレビなどを持っている例があった。(テレビは、ガソリン式の発電機をつないで使う。)また、オートバイを馬代わりに乗っているゲル家族も少数ながらみられる(註21)。これらの機械製品の導入は、遊牧地にあっても、かつてのゲルでの生活の伝統を徐々に変えつつある。

## (2) ゲル内の生活財配置

ゲル内の空間には、伝統的な使い分けの区分があることが知られている(註22)。入り口からゲルの中心を通る線を仮想し、ゲルに入って中心線より右側(奥から入り口を見れば左側)が、女の持ち物が置かれ女が座る女の空間。反対の左側(同・右側)が、男の持ち物が置かれ男が座る男の空間とされる。ゲルの中心は炉(地床炉)の定位置。中心線の一番奥が仏壇の定位置。その手前が家の主人(あるいは高位の賓客)の座。客の座は左側奥、などと区分される(図7)。

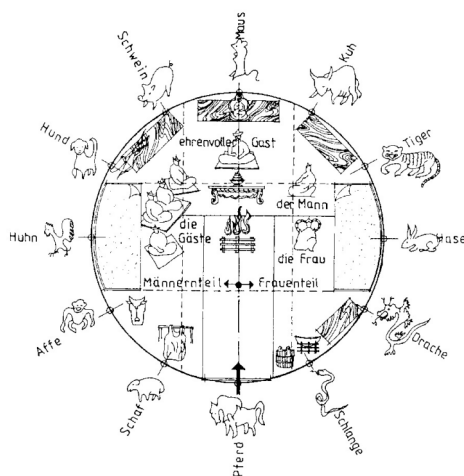


図7 ゲル内部空間の伝統的意味づけによる区分  
[Maidar 1976](註23)

この伝統的空間区分は、現代のゲルにあっても意外なほどによく守られている。調査に訪れた我々が招き入れられたのも、(座れる人数の許す限り) 中央奥とその左側(ベッドあるいは小椅子)であったし、ほとんどすべての調査事例で、ゲル中央にはストーブが置かれ、左右の壁際にベッド、鍋や食器棚などが並ぶ台所的なる空間は入り口に入って右側手前であった(註24)。

なお、ベッドをもう1台置く場合は、奥正面の、かつての仏壇の位置に置く例が多い。ゲル内の左右対称性がある程度意識されているとも考えられる。

どのゲルも、生活財の配置は非常によく似ている。なぜここまでみなが画一的な配置なのか、と疑問に思うほどだった。しかし、男女に対応した左右の慣習的区分を別にすれば、このような配置には機能的な理由も考えられる。例えば、トーン(天窗)からの排気のためにもストーブは中央に置かねばならず、その他の生活財はストーブから一定距離を離して、壁際に並べることになる。貴重な物をしまっておくのは(飾って置くのは)人の出入りしない奥壁際が良い。乳製品づくりの用具や容器、食器などは、ゲル屋外への出し入れがしやすい入り口のそばが便利だろう。ストーブ手前側では人が立ち働き、奥側では人が座りこむ、という機能的使い分けが意識されている(床にフェルトやカーペットを敷くのも奥側である)。また、清潔意識と関わる使い分けも認められる。例えば、入り口のすぐ左側に箒、歯ブラシ入れ、洗面台(定住ゲルの場合)を置く家が多いのは単なる偶然とは思えない。右側の台所部分と入り口を隔てて離す意識が感じられた。

ゲル内の生活財配置は、遊牧・定住を問わず、彼らの住生活の実態を直接的に反映しているはずである。ゲルにおいては、生活行為と生活財との対応が、特に目に見えやすいかたちで生活財配置のパターンに現れている。この理由として、円形一室住居という単純な空間のかたちが一定であること、そして、後述するように不要不急のモノを持たず、生活財の数が限られていることなどがあげられる。

住生活のスタイルといわれるものは、起居様式(慣習的な生活動作ばかりでなく、視線のあり方や方位感、清潔感等までを含めた「身に染まった文化」と、それを支える住空間のかたち、および住空間内に配される道具群(生活財)との相関によって成り立っていると考えられる。このような意味で、ゲルの生活財配置の実態記録は、今後もモンゴルにおける住生活の構造を探っていくための基本資料となるだろう。

### (3) ゲル内の景観と装飾

生活財の配置は画一的であるとしても、それら生活財が集まってつくられるゲル内部の景観には家ごとの個性が認められる。それは家の生業のちがい、遊牧生活か都市の定住生活を反映する。特に景観要素のひとつである装飾(広い意味での飾る物)は、家人の好みや生活意識の表現と見ることもできる。





写真1 三面鏡を使ったチェスト上の装飾



写真2 三面鏡を使った仏壇のしつらえ



写真3 箱を使った仏壇のしつらえ

ゲルのなかで家人の装飾意識を最もよく表す場所は、奥側のチェストの上である。遊牧か定住かにかかわらず、ほとんどのゲルで、ここが飾り物の置かれる特別の場所になっている。その標準的な形式は、チェストの上に三面鏡を置き、その手前や横に家族写真、置物、置き時計、ラジオ、ラジカセなどを並べる（写真1）。ここに仏壇のしつらえをする家もある（写真2）。この配置の仕方からみて、三面鏡が姿見だけのために使われているのではないことは明らかだろう。ゲルばかりでなく、木造やコンクリートアパートの事例においても、主室の入り口から最も奥まった所に三面鏡が置かれていた。鏡には、何らかの象徴的あるいは記号的な意味があり、これを置くことでその周囲が聖なる空間として印づけられているのかもしれない。三面鏡を使うこの装飾形

式がいつころから主流になったのかは不明だが、伝統的なものではないだろう。ラマ教の信仰が弾圧された社会主義政権下で起こってきた新様式ではないか。

調査したゲルの全戸が、奥のチェスト上になんらかのかたちで家族写真を飾っていた(註25)。写真は一枚物の場合と、さまざまな機会に撮られた家族の写真を集めて額に入れたものがある。家族写真は、ゲル内の視線を集め、家族の精神的なよりどころとして、かつての仏壇にとって代わりつつある。

今回調査では、独立した家具形式の仏壇(註26)を置くゲルはひとつも見られなかったが、それでも奥のチェスト上に仏壇のしつらえを設けているゲルも半数あった(10戸中5戸)。うち2戸は仏画や教典などを専用の箱に納め、3戸はチェストあるいは戸棚の上に出し並べていた(写真3)。日常生活におけるラマ教信仰の現況を示すものとして興味深い。

このほか、数は少ないが、そのゲルの家人の趣味をあらわす装飾品も見られた。例としては、モンゴル相撲の力士の写真入りカレンダー、草競馬の入賞メダル、雑誌から切り抜いた映画俳優の写真等があった。

#### (4) ゲル居住とバイシン居住

遊牧地域のゲルと都市のバイシン(ゲル以外の固定住居。木造住宅やコンクリート造アパートを指す)とでは、日常生活の実態は大きく異なる。しかし、事例でみてきたように、遊牧ゲルと定住ゲルとの間には、基本的な起居様式や生活財配置において、かなりの共通性がある。遊牧生活と都市での定住生活とが非常にかげ離れているにもかかわらず、ゲルという住居形式(ハード)の中での住まい方(ソフト)はあまり変えずに済ませている。見方を変えれば、遊牧地でのゲル内の住まい方・住み心地をできる限りそのまま維持していただきたいために、都市での生活に多少の不便はあってもゲルに住まい続けているという側面がある。

都市のゲル地区内の定住ゲルと木造住宅とを比較すると、ゲルの方が雨の後の手入れが大変だというし、冬には外側のフェルトを増やして防寒しなければならないなど、維持管理の手間がかかる一方で、いざとなれば簡便に移動できる柔軟さもある。同じゲル地区にあるゲルと木造では、住空間のかたちこそ異なるが、日常の生活行為や家事労働の実態には大差がない。電気、給水、燃料、便所、入浴などの条件は、ゲルでも木造でも同等である。

都市の日常生活における決定的な違いは、ゲルかバイシンか、ではなく、ゲル地区居住かアパート居住かの間にある。アパート地区には上下水道が完備され、おそくとも70年代以降に建てられたアパートには各戸に浴室があり、集中暖房方式のアパートでは、温水も供給される。調理は電気オープン・レンジでおこなう。ゲル生活の慣習とはまったく断ち切られた別世界といえる。アパートへの入居権(これは相続もできる)を得ることで、日常の生活はまるで変わってしまうのである。

ゲルの暮らしに愛着がある老人はゲルを好み、それのない若者はアパートを好む、という話もきいた。しかし、前述した事例5の若夫婦のようにゲル居住の体験があっても、できるなら便利なアパートに入居したい、というのが本音ではないか。家事労働の多くを担う女たちにとっては特にその思いは切実だろう。しかし、次に述べるように、ゲルから木造ないしはアパートへの住み替えという一様な「近代化」の流れが、必ずしもすべてにあてはまるわけではない。

#### (5) ゲル居住の将来

ゲルは遊牧生活に密接に結びついたものであり、部分的な改良が加えられたとしても、これからも遊牧民の標準的な居住形態であり続けるだろう。自動車道路沿いの遊牧地域ではトレーラーハウスに住んでいる例も希に見られたが、ゲルの居住性や軽便さを考えると、多数を占めるようになるとは到底考えにくい。

一方、都市におけるゲルでの定住は、都市への急激な人口集中とアパート不足が生んでいる過渡的現象のようにみえる。しかし、都市への流入が今後も続くとするなら、市場経済に移行した現在ではなおさらのこと、低廉な家賃の公共住宅が、近い内に十分に供給されるようになるとは考えにくい。するとこの現象は、今後も続くものと予想される。

今回調査した遊牧地のゲルに住む人々の中には、若い頃は都市に出て働き、定年を迎えるとともに故郷に帰ってゲル暮らしに戻っている例がいくつもあった。また都市の定住ゲルでは、都市の中で何度も引っ越しているものがあった。このような流動のケースが例外的でないとするれば、木造への過大な投資は得策ではない。遊牧民が都市に出ようとするなら、すでに持っているゲルで定住してしまうのが資本も要らず、手っ取り早い。その後の日常生活に多少の不便はあるだろうが、いざとなれば移動できる柔軟性は、ゲルによる定住を続けさせる理由のひとつだろう。そしてなによりも、ゲルならばこれまでの遊牧生活を通してしっかりと「身に染まった」住まい方（住文化・起居様式）をほぼそのままの形で続けていられる。ゲルには、それを可能にする柔軟さがある、といってもよい。ウランバートルのような大都市の周辺部でも、各郡の中心地になる小都市でも、木造との併用を含めて、今後も引き続きゲルによる定住は残るのではないだろうか。

終わりに ----- 物を必要以上に持てない暮らしが示唆すること

ゲルの生活財を記録して実感したのは、一戸のゲルの中にある物の数の少なさである。今回調査では品目数を数えることも、チェストや戸棚の中まで見ることもできなかったが、それでも、現在の日本の一般的家庭の物の数量と比べれば、かけ離れて少ないと予想できる。この傾向は都市の木造やアパートでもいえるだろう。

いうまでもなく、ゲルの物の少なさ、季節ごとの移動を強いられる遊牧生活と無縁でないだろう。物を必要以上に多く持つことは死活問題であり、日本の住宅にあふれているような死蔵さ

れている物はほとんどない。物を必要以上に持てない暮らしをしている遊牧民にとって、物を所有することの意味は、日本の我々の考えることとはかなり違っているのではないか。翻ってみると、なぜ、日本の住宅には物が多いのだろう。もしも、物であふれかえった日本の住宅の実態を彼らに見せたなら、どんなふうに思うだろうか。今回試みた生活財の考現学的記録を、このような問いを含む比較研究の出発点としたい。

註：

1) 「生活財」とは、生活のために人々が所有している物の総称。もともと生産のための物、「生産財」と対比した語だが、本稿では遊牧に使う物（生産財）も含めて、住居の中に置かれている物の総称として使う。なお、この語を発案し、近年の生活研究の分野で使いはじめたのは、商品科学研究所と（株）CDI の一連の「生活財生態学」調査である。『生活財生態学』リポート（1980）参照。

2) 民家研究の草分けでもあった今和次郎は、考現学に先立ち、日本各地の民家調査においても、建物ばかりでなくその中の物（生活財）をふくめたスケッチ記録を数多く残している。（今和次郎『日本の民家』相模書房, 1954）。所有している生活財とその配置から生活像を読みとろうとした考現学草創期の試みとして、今和次郎「新家庭の品物調査」、同「下宿住み学生持ち物調べ（1）（2）」（『モデルノロジオ』春陽堂, 1930 所収）等。

3) 現代モンゴルの住生活の実態についての本格的な記録化・紹介はまだ少ない。例外として、内澤句子「モンゴル人の生活術」（『遊牧民の建築術』INAX 出版, 1993 所収）、野沢延行『モンゴルの馬と遊牧民』（原書房, 1991）の一部に、考現学的な視点からのゲル内部空間の記録が見られる。

4) 現代モンゴルの住居空間の概要については、本誌・山根論文 参照。

5) ゲルの10例のうち、遊牧生活のものが6例、定住しているものが4例。定住ゲルのうち1例はゲルの外側を木造で覆った実験的な事例、木造のうち1例は都市居住者の夏別荘「ゾスラン」であった。

6) このゲル集団の3戸は、一年中いっしょに移動しているわけではない。ロブサーダエ家を中心にみると、秋営地はゲル2戸、冬営地はゲル4戸、春営地ではゲル3〜4戸になるという。移動はハエナグ（ヤク牛）に家財一式を積んだ荷車（ゴムタイヤ付き）を牽かせていく。最大の移動は夏営地・秋営地の間の約20km。

7) ダルハト族はフブスグル県に最も多く住む少数部族。しかし、このゲルや生活財を見る限りでは、モンゴルで大多数を占めるハルハ族との相違はみつけられなかった。

- 8) 現地で「アブダル」などと呼ばれる、前開きの扉付き木製収納家具。以下同。
- 9) ツェグメッド「遊牧民の身のまわりの物いろいろ」(未公開資料・大阪外国語大学モンゴル語研究室)、梅棹忠夫「モンゴル遊牧図譜」(梅棹忠夫著作集・第二巻『モンゴル研究』中央公論社、1990、p562-614)などに、遊牧生活で使われる伝統的道具類の総覧的な図示記録がなされている。上記[梅棹]は、1944-45年の内モンゴル調査での見聞に基づく。
- 10) 同家の立地・集落・敷地・建築については、本誌・山根論文参照。
- 11) 伝統的ゲル内部空間の使い分け・意味的区分については、D. マイダル『草原の国モンゴル』新潮社(1986)p99-109、Tsultem, T. "Mongolian Architecture", State Publishing House, 1988、蓮見治雄「ゲルのコスモロジー」(『遊牧民の建築術』INAX 出版, 1993, p13-19) 参照。
- 12) 現在のウランバートル市全人口の約半数がゲル地区に居住。ゲルは約4万戸という。
- 13) 本誌・山根論文参照。
- 14) 公式統計によると、1989年時点で、テレビはモンゴル全家庭の41パーセント、冷蔵庫は35パーセントに普及。"Mongolia" (統計図集), State Statistical Office, (1991)
- 15) 多くの都市生活者が、遊牧地の親戚から大量の肉類をもらっている。(本誌・西川論文参照。)
- 16) 本誌・山根論文参照。
- 17) 本誌・山根論文参照。
- 18) モンゴルでは家庭用熱源としてのガス供給はない。停電時の非常用あるいはズスランに行くときに使うカセット式ガス・コンロは売られている。
- 19) ゲルのベッド横の壁にカーペットを掛けるのは、もともと就寝時の断熱効果のためにフェルトを掛けていたのが装飾を兼ねるものに変化したのではないか。旧ソ連の影響とする説もあるが詳細不明。
- 20) 生活財の点数については、居住している家族の人数、年齢構成、その家の「経済力」などとも関係するはずである。また、遊牧生活では、持ちきれないものを冬営地の物置に置いておくなど、季節的変動もある。ここはあくまで夏営地の調査事例からの推察にとどまる。
- 21) 1989年時点で、ミシンは65パーセント、ラジオは48パーセント、オートバイは10パーセントの家庭に普及。前掲註14に同じ。
- 22) 前掲、註11に同じ。
- 23) Maidar, D. "Analyse des Wohnungszustandes in der Mongolei vor 1921", (c.1980) より。(図版はMaidar, D.; Darsuren, L.: Ger (Die Jurte), Ulan-Bator, 1976 からの再掲。)
- 24) 今回調査では、この原理にあてはまらない例外的な事例として、台所部分に収まりきれないためか、入口に入って左側に乳製品の入った大鍋を並べている例(セレンゲ県バロンブレン郡)、入って左側に食器棚を置き、右側には馬乳酒つくりの革袋を釣り下げている例(ウブルハンガイ県ブルド郡)を実見した。

25) 三面鏡を使った飾り物コーナーを設けていたゲルは、調査した10戸中で8戸。この形式で家族写真を飾っていたのは4戸。家族写真の額を独立でチェスト上に飾っていたのは6戸。

26) 滋賀県立大学では、ゲルとその中の伝統的生活用具類一式を資料として所蔵している。(1996年春購入。ゲルはフプスグル県出身者の製作。) この中には分解・組立式の独立家具型の仏壇があるが、今回調査では、ラマ僧の僧坊以外でこのような独立型の専用の仏壇を使用している家は一例もみられなかった。現在一般的な仏壇の形式は、チェスト(アブダル)の上の一角を使って、仏画の額や教典、灯明、小マニ車などを配置したものとみてよい。

謝辞：

ウランバートル市での調査家庭は、現地研究協力者である「ゴビ・プロジェクト」代表のG. ミエゴンボ氏(元・党大学長)、およびご子息のM. エンフボルト氏(チンゲルティ地区次長)の仲介によって訪問調査することができた。また市内のゲル地域、アパート地域の現状と再開発計画については、T. ジャダンバー氏(ウランバートル市・都市建設計画課長)、D. ダンダルバートル氏(国立デザイン・リサーチセンター長)にご教示いただいた。聞き取り調査はすべて、T. ムンフツェツェック姉(ウランバートル国立大学)の通訳による。そして、異邦人の突然の訪問をこころよく迎えていただいたばかりでなく、めんどろな調査に長時間協力してくださった全調査家庭のみなさんにも、心から感謝したい。

(初出：滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』第3号, 1997年)